

ONE LOVE 通信 56号

2015年12月20日発行

今年も残すところあと数日。ワンラブにおいては大きな事件もなく、無事に終えることができそうです。数年前に洪水の被害を受けてから、どうにもついてないことが続き、精神的に落ち込むことも多かったので、来年も穏やかに過ぎていくことをただ望みます。2016年はどんな年になるかな？3月にはフランスで行われるアビリンピックに参加する予定です。しかし前回のような全面的な資金の援助がアビリンピック大会から得ることができず、資金繰りで頭を悩ましているところです。さて今回は果たして何人参加させることができるのか？



【ブルンジに未来はあるのか？】

2007年からブルンジにも義肢製作所を設け、ルワンダと同様に義足を作り続けてきましたが、5月にクーデター未遂が起こり、混乱が続いています。

アフリカでしばしば起こる問題として、大統領がその国の法律を無視して、そのまま何年もその座に収まり続けるということが挙げられます。

ブルンジの場合もそれ。大統領の任期を2期終え、新しい人にその席を譲らなくてはいけないにもかかわらず、力づくでその権力にしがみついているため、政府と反対する政党・勢力・国民が対立し、国の中で暴動が起きています。

ブルンジの義肢製作所は首都ブジュンブラにあり、ブルンジのスタッフ（義肢装具士と事務、警備員など）とルワンダから1乃至2名の義肢装具士で運営されています。

暴動が起こってからルワンダのスタッフはルワンダに避難し、ブルンジのスタッフのみで運営を続けていました。

町のあちこちで道路が閉鎖され、火をつけられ、投石や銃撃戦も起こり、5月のクーデター未遂以降、既に400

人近い人が殺され、21万人以上が国外に避難しています。

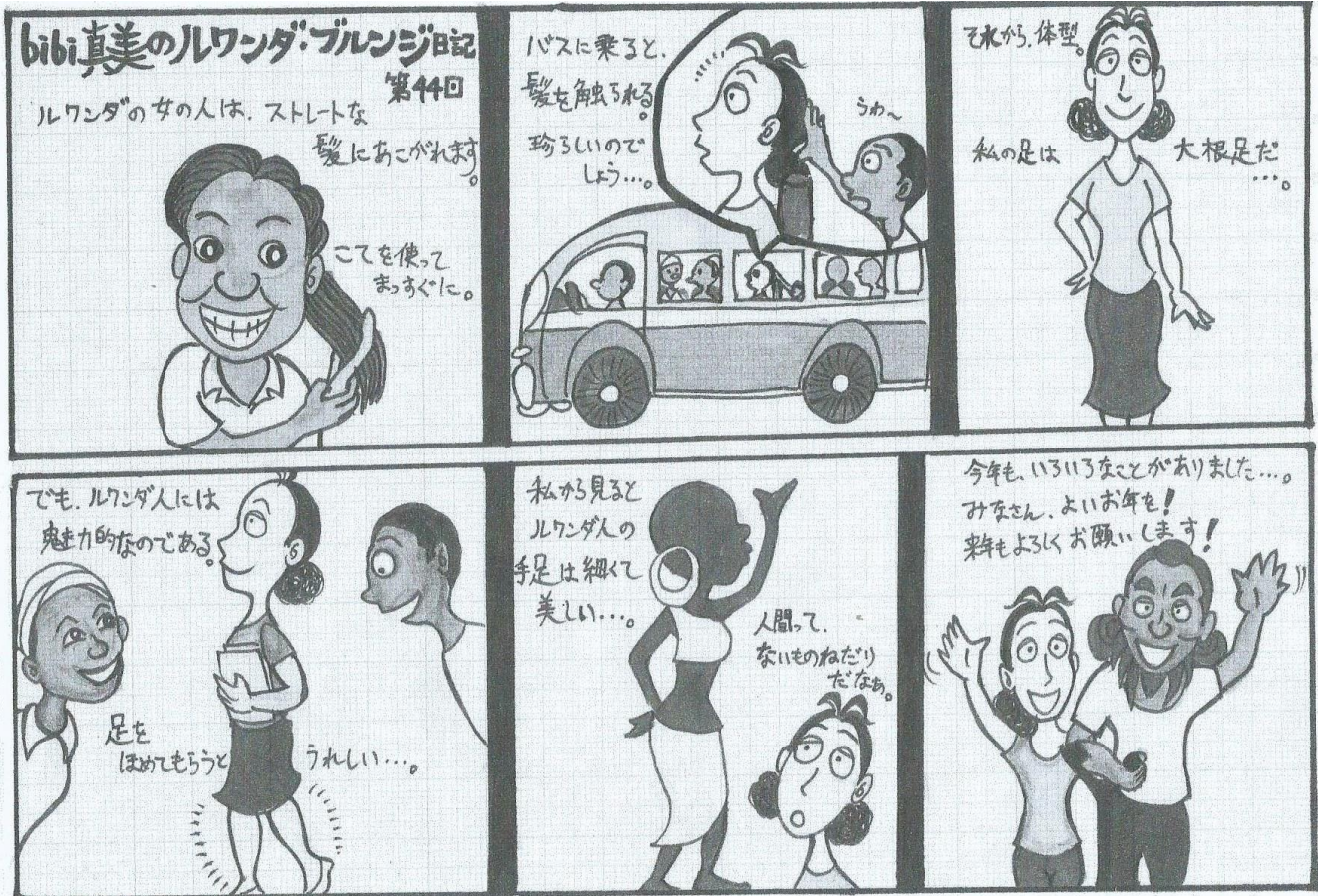
しかしそんな状況は日本のニュースではまったくと言ってよいほど報道されていません。ここにも世界の関心から取り残されている国があるのです。

ルワンダ国内でもブルンジナンバーの車を見ることが増えました。たくさんの人が隣の国であるルワンダに逃げてきています。お金を持っている人たちは、車や飛行機で国を離れ、お金を持っていない人は、着の身着のまま国境を越えて逃げてきます。

首都の街中に位置する義肢製作所近くでも暴動が続き、危険なため、スタッフは義肢製作所に行くことができません。銀行・お店、そして病院や学校も十分に機能していないようです。

私とガテラも2ヶ月に一度はブルンジに行っていたのですが、そんな状況のため行くこともできません。

ルワンダの人たちもブルンジの状況を心配し、情報を交換し合っています。しかしその情報も大きく誇張されていたり、あるいは正確な数字が公表されていないため、どこまで正しいのかわかりません。



ルワンダで起こった1994年の大虐殺のときもそうでしたが、人はどこまで残酷になれるのでしょうか？

殺すだけでは飽き足らず、わざわざ死体から心臓や目玉をくり抜いたり、女性は散々レイプをされた後、棒切れなどを使って女性器をつつき回され、拳銃の果てに殺す。そしてそんな死体の写真が SNS を使って、あちこちに流れています。

この状態、欧米諸国やアフリカの各国が介入して、解決に向けての対策を練っているようですが、頑なにその座を退こうとしない現大統領のために、ますます泥沼にはまっています。

ブルンジで起こっている殺戮は「第二のルワンダ大虐殺」になり得ると言われていますし、実際ルワンダにいてその状況を見聞していると、決して大げさな表現ではないように思います。

1994年のルワンダ大虐殺は、大統領機が撃墜されてあっという間に虐殺が広がっていき、短い時間に大量の人たちが殺されました（3ヶ月のうちに100万人）。

その殺戮のスピードの速さと殺される人の多さにメディアも注目し、テレビやラジオ、新聞などを通してその様子は世界中に配信されました。

ブルンジでも同様にたくさんの数の人が殺されているにもかかわらず、何年もの時間をかけて、いくつもの場所で「小出しに」殺戮が起きているため、世界は注目をしません。一つ一つの殺戮がトピックにならないからです。

現在、ISによって世界中に恐怖が渦巻いています。日本人も標的とされている今、安心して歩けることはありません。



暴動で子供を殺されてしまったお母さん。泣き叫んでも、子供は戻ってきません。

フランステロのあと騒がれていますが、大国でない場所で戦争や殺し合いが起こっても、日本ではほとんど報道されません。人々に伝えられないまま、命を失っていく人が毎日毎日いるのです。

今回私なりにブルンジで起きている事実を探し、日本語で発信されているニュースがほとんどないということに、正直なところ「ああ、やっぱりな…」と思いました。

日本だけでなく、平和にボケてしまった人々の間では、こんなことどうでもいいことなのです。どこで誰が死のうと、自分には関係ない。

でもね、メディアが発信しなかったとしても、一個人として発信することはできる。そしてそれを知ろうと思っている人も必ずいるはず。そんなふうに希望を持ちながら、ブルンジの情報を探し続けています。

しかしこの事態、どういう方向に行くのかわかりません。

ルワンダとブルンジは昔から似たような背景を持つ、兄弟のような国。植民地にされ、国民を分けられ、対立が起きているということもルワンダと同じです。

今後のブルンジの状況を、ルワンダの人たちも非常に気にしており、最近はその話題で持ちきりです。

私たちのブルンジの義肢製作所も、この事態が続けば閉鎖を余儀なくされます。

私はルワンダに来てから、簡単に「戦争反対！」と言えなくなっています。もちろん戦争のない世界を望んでいるのは事実です。でも戦わなくては自分や家族を守れないという状況に直面している人も多いからです。

そんなふうに心の中で葛藤しながら、それでもやはりいつも弱者が犠牲になる戦争がなくなるようにと願ってやみません。

日本は戦争を放棄した国です。それはとても勇気のあることで、世界に誇るべき決断だと思います。ルワンダの人たちと接し、意味のない虐殺を経験した彼らが、日本のこの決断を参考にしたのかわかりません。でもルワンダの人たちは殺戮の原因となった民族を失くす決断をしました。どうして世界は日本とルワンダから学べないのでしょうか？人類は愚かであると結論付けることしかできないのでしょうか？

ただひたすらこれ以上ブルンジの暴動が悪化しないよう願うガテラと私です。

【そこから発生している問題に挑むために…】

ブルンジからたくさんの人が難民となってルワンダに流れてきています。

着の身着のまま逃げてきて、劣悪な環境の中生きている人、一通りの財産を持って逃げることでできた人、その状況はさまざまです。

そしてその中には障害を持った人もいます。

本来ならばブルンジの義肢製作所で手続きをするべき人が、ルワンダの義肢製作所までやってくるようになりました。彼らは義足を必要としています。

この問題が発生する前、私たちは初めてクラウドファンディングというものに挑戦し始めました。インターネットを使って、公に支援を求め、賛同した人はウェブサイトから募金ができるという仕組みです。

このところしばらくルワンダで義足を配布するための巡回診療を行っていなかったため、巡回診療を通して100人の障害者に義足を配ろうと思ったからです。

募金をする期間は10月26日から90日間。目標は215万円でした。

そしてそれはありがたいことに、早い時点で目標額に到達しました。しかしそうしているうちにブルンジの問題が悪化し、どんどん難民がルワンダに逃げてきて、その中には義足を必要としている人たちも少なからずいるということがわかりました。既に20人近いブルンジからの障害者が、ルワンダの義肢製作所を訪れています。

そこでまだ期間に残っているクラウドファンディング

の目標額を430万円と再設定し、合計200人のルワンダとブルンジの障害者に義足を作ることに挑戦をしているところです。



ルワンダの難民キャンプに逃げてきた子供たち。争いの被害は、いつも弱者の元に容赦なくやってくる。

皆さま、以下のウェブサイトをご覧ください。
<https://readyfor.jp/projects/rwandagisoku>

ここをご覧になっていただくと、今回の「ルワンダ大虐殺で足を失った100人に義足と杖を届けたい!」というワンラブのプロジェクトがあり、クレジットカードや銀行振り込みで資金のご協力ができる仕組みになっています。ご支援いただいた方にはそれぞれ義足を受け取った障害者からのメッセージやバナナの幹の皮を利用して作ったバナナカード、ルワンダ産の香辛料を受け取るなどの特典があります。

ご支援募集の締め切りは1月24日(日)23:00までです。

ルワンダの障害者には巡回診療を通して、義足の製作と配布を行う予定で、ブルンジの障害者には暴動が治まっていればブルンジの義肢製作所で、治まっていない場合はルワンダの義肢製作所を訪れた障害者たち、また現時点では確定していませんが、ルワンダ国内にあるブルンジの人た

ちの難民キャンプを訪れて製作しようと考えています。

どうぞ皆さま、ぜひ上記ウェブサイトをご覧ください。ご協力をお願いいたします。またこのクラウドファンディングの情報を、ご家族・ご友人の方々にもお伝えください。

一人でも多くのご協力をいただければ、それだけたくさんの方の義足を作ることができます。ルワンダそしてブルンジの障害者が義足を履いて再び立ち上がることができるよう、皆さまのご協力をお願いします。

【ところでパソコン教室の様子は?】

ワンラブ通信を通してお伝えしてきていますが、2月に障害者のためのパソコン教室が始まりました。

以前から交流のあった東北福祉大学の先生がこのプロジェクトの代表となり、JICAから資金の援助を受け、進められています。

義足を履いただけでは、障害者の直接の収入にはつながっていきません。そこでパソコンの技術を学び、収入につなげていこうと考えています。

ワンラブは現地のカウンターパートとして、補佐をするのが役目です。場所はワンラブランド内。教室として使う場所を提供します。但しまずはその建物の改築。これはちょうど今から一年前のこと。JICAからの資金が遅れ、予定よりも建築作業のスタートが大幅に遅れました。現場監督はガテラ。時間がないためクリスマスも正月もなく、朝は6時ころから、夜は遅いときは夜中12時近くまで建築作業です。私は使った費用の経理や日本への報告など。しかし予算がどんどん減らされてしまったので、大変でした。つまりこの予算でやると足りないのです。だから以前使っ



ルワンダ事務所代表ガテラより

【大人が見本になるということ】

ずいぶん前、ワンラブのレストランで、自分たちが日本でダビングした映画を見せていた時のこと。

ウェイトレスの女性が騒ぎ出した。何事かと思ったら、「ビデオで教育上よろしくないものが流されている」とのこと。

画面の中では男女のラブシーンの真っ最中だった。特別過激なわけでもなく、映画の中のごく普通のラブシーンのように思えたが、人によってはこの場面も不快な場面として映る。苦情が出たので、その場は違う映画を流して事なきを得た。

アフリカは性におおらかだと思われがちだが、実はとても厳しい部分もある。

日本に行くと、子供の目に付くところに大人の雑誌が並べられてあり、子供も簡単にそれを手にすることができる。しかしルワンダではそういったいわゆるアダルト系の雑誌というものは、公に発行されていない。以前、ケニアを歩いているとき、道端でそういう古雑誌が売られていた。パラパラと中を開いてみると、女性のお尻とか胸は黒いマジックで見えないように消されている。だから子供たちは女性の裸に興味本

位で見ることができない。

そしてテレビの番組もそうである。虐殺後ルワンダには国営放送が一局あるのみであったが、外国の映画を放送しており、キスシーンの場面になったときも、画面が真っ黒になり見ることはできなかった。

しかし最近では民営のテレビ局もいくつかでき、競うように新しい番組を流している。そこで見た映画の中にもラブシーンがあった。しかもかなり大胆なラブシーンだ。これもそのうち画面が真っ黒になるなどと思いながら見ていたが、一向にそうならず、すべてを見せていた。

これはいけないのではないかと?

週末の真っ昼間である。子供たちがテレビを見ている可能性はたくさんある。

国が平和になり、人々は娯楽を求めるようになった。しかしそれに伴い大人のモラルも低下してきたとしか思えない有様だった。時期が来れば自然と子供は大人の仲間入りをする。しかしまだそうならないとき、大人の欲望のために、性に関する情報を公で流すことに、俺は反対だ。

子供たちはまだ自分で選択をする力がない。こうしたモラルを守るのは大人の役目だと思うのだが、いかがだろうか?

た資材の再利用です。壊したレンガを一個一個ばらしたり、取り外した窓枠の鉄板をもう一度切って溶接して…と、そんなことをすると新しい資材を買って作る倍以上の手間隙（時間も人材も）が必要になってしまうのです。

年末年始建築に終われ、また同時に本来のワンラブの仕事の資金を稼ぐため、レストランではクリスマスと大晦日にパーティを開かなくてはなりません。だからこの時期、ガテラも私も睡眠不足とストレスで、正直なところぶっ倒れてしまいそうなくらい疲れていました。

そんな甲斐あって、何とか2月半ばに授業はスタート。ほとんどパソコンを知らないという人たちが生徒です。

しかし物事は思ったように進まないのです。私たちが日本に滞在中、なんと日本から派遣されたコーディネーターが突然辞めると言い出しました。そしてそれに続き、講師として雇っていたルワンダ人も突然辞めました…。

焦って日本から電話をし、代理の講師を探し、私たちの不在中にも授業を進められるよう手配したものの、どうしても離れていると管理をしづらくなります。

3ヶ月の日本滞在の後、戻って教室の様子を見てみると、なんともお粗末な授業内容であるとともに、講師や生徒の緩慢さが目立ちます。

幸い日本からの新しいコーディネーターも見つかり、仕切り直しです。新しい講師探しも、日本から来ている東北福祉大の1先生と一緒に面接をしました。

そして今、最初の生徒たちはフォローアップコースに入り、更に新しい生徒が10人増えました。

このプロジェクトの最終目的は、組合を作り、自分たちでパソコンを使った仕事を取ってきて、収入に結びつけることです。しかしそれにはまだ全然技術が足りません。

例えば日本でちょっとパソコンをいじった人ならできそうな、ワードやエクセルを使ったパンフレットなども、まだ彼らはできません。この予想以上に覚えが遅いのは、ひとえに前任のコーディネーターの管理が足りなかったこと、引継ぎも何もなく突然辞めてしまったこと、また講師の力不足が原因だと思います。そして何より、最終ゴールはどこかという目標が曖昧なまま、前任者も講師も授業を進めていたことだと思います。

今、新しいコーディネーター、S嬢の下、すべてを仕切りなおしてプロジェクトが進められています。多分S嬢は、ストレスの塊となっていることと思います。初めての土地で、初めてのルワンダ人を相手に何かを進めることは、そう簡単ではないということを、私なりに経験しているので、私は彼女に逃げられないよう、ストレスを減らすためにも愚痴を聞いたり（実際、私が愚痴を言っている割合の方が多いかもしいが…）、他愛もないおしゃべりをしたりして時間を過ごすようにしています。

この教室に通うための授業料は取りません。また足に障害を持つ人も多いので、送迎サービスもしています。授業は午前か午後。一日3時間です。

しかし生徒たちはフォローアップコースが終わったら、組合を作り、仕事をする場所のみが提供されることになり

ます。つまり交通費は自分で負担しなくてはいけなくなります。そうなったときに、果たして何人が残るのか？



ただ今勉強中。障害者の中には、中学程度の学校しか卒業していない人もたくさんいます。そういう人にこそ、技術を学んでほしい。

今はみんな自主的に通ってくると言っていますが、結構難しいだろうなと思っています。残るのはほんの数人だと思います。人から提供されればやるけれど、それがなくなったらやらない、そういう傾向が果てしなく強いからです。援助がなければ、自分では動かない。それは経済的な理由もありますが、精神的に他力に頼ることに慣れてしまっているということもあげられます。

でもその代わり残った人は、それなりに意思のある人と受け止めてよいと思います。

フォローアップコースが終わるのは来年1月。彼らがパソコンを生業として使えるかどうかは、すべて彼ら自身にかかっています。

というわけで、もっともっとお尻を蹴っ飛ばして、彼らの士気をあげていきたいのであります。

【出るぞ、3度目！アビリンピックなのだ！】

3月23日から26日まで、ワインで有名なフランスのボルドーで第9回目のアビリンピックが行われる。ワンラブにとっては3回目の出場だ。

今回も出場するのは義足のソケットを作る競技。前回もガテテが参加したが、今回もガテテの出場となる。同じ選手を2回参加させるのも、なんとなく物足りない気がするが、今ワンラブで働いているガテテ以外の義肢装具士は健常者なのだ（見習いは障害を持った人もいる）。アビリンピックは障害者のための大会なので、健常者は出られない。だからどうしてもガテテになってしまうのであります。

また今回はワンラブに限らず、一般の障害者にも参加を呼びかけました。でも残念ながら誰も見つからず。

前回、韓国で行われたときには、航空券から宿泊費、そして滞在費もすべてアビリンピック大会側で負担をしてくれたけど、今回はなし。だから自分たちで費用を集めなくてはいけないのだ。……ということ、一般の参加者を募集したときに伝え、つまり自分の渡航費は自分でどこから捻出してくるべしとお願いした。

その結果、誰も手を上げることができなかったわけです。

うーん、残念だなぁ。でも仕方ないか。

今予定しているのは、ガテラと私、そして競技者としてガテテ。そして9月からルワンダの映像作家見習いがガテラのドキュメンタリーを撮っている、その男性と助手の女性。この二人も、今必死で渡航費を集めているようである。

今回のアビリンピック、競技は二日間だけで、いつもよりも短い。多分予算が大変なのだろう。種目は工芸品を作ったり、料理、パソコン、電気関係、服飾などいろいろある。ヨーロッパ開催は、チェコで行われて以来のことである。しかし先日フランステロがあり、本当に予定通り開催できるのだろうか？という疑問は残る。その頃も警備は物々しいのだろうか？

そしてヨーロッパやアメリカなど、先進国に行くときにいつも気になるのは、入国管理のときの人種に対する偏見だ。日本のパスポートを持つ私は、大体何も問題なく入国できる。しかしルワンダパスポートを持っていると、行く場所が同じでも、嫌がらせとしか思えない質問を延々としてくる。



韓国のアビリンピックに行ったとき、韓国の衣装を着て、コスプレを楽しむガテラ。

テロがあったから、ますますそういうことに敏感になって、ガテラとかいろいろ聞かれるんだらうなあ。例えば以前はこんなことを聞かれた。私が先に入国管理の手続きを済ませ、後ろにいる人間も同じ目的で、同じところに行くといっているにもかかわらず。

「招待状は持っているのか？」「現金はいくら持っているんだ？」「クレジットカードは持っているのか？」挙句の果ては、ガテラが履いている装具を脱ぎ、パンツードンになれとまで言われることもある。だから先進国に入国するとき、足が悪く、ただでさえ歩みの遅いガテラは、更にパンツードンになるという工程も増え、人一倍早くアクションを起こさなければいけないという事態になるのである。

そんなことを考えると、気が重くなってくるが、とにかく行くのだ！皆さん、応援してくださいね。結果報告は次回のワンラブ通信で！

【価値観の違い】

ないものねだりという言葉があります。

ルワンダにいと、特に容姿や体型のことで、それを感じる事が良くあります。

例えば髪。ルワンダの人の髪の毛は、チリチリしています。パンチパーマのような状態ですね。でも女の人はそんな髪の毛、おしゃれじゃないから嫌いです。だからこてを使って、ストレートにします。あるいは最近は女性の、ガテラの髪形のようなドレッドヘアが流行っています。要するに、下に流れていく髪型が好きなのですね。

だから日本人のような髪質と言うのは、非常にうらやましい。そして不思議なものなのです。

昔、アフリカをバスで旅していたとき、後ろから触られる気配を感じました。後ろを見ると、小さな子供が慌てて目をそらす。前を向くと、また触られる気配。

そうなのです。アフリカを旅行した人は経験あるかと思いますが、彼らにとってまっすぐな髪は珍しくて、触らずにはいられないのです。ちょうど私たちがアフリカの人の髪の毛を触ってみたいのと同じように。

ガテラは日本に行くと、いつも髪の毛に触られます。本当は大人も触りたいくせに、そんなことをしたら失礼だと思って、遠慮して触りません。でも子供が触り始めると、一緒になって触り始めます。誰でも自分と違うものを持っていると興味がわくのですね。



そして韓国のアビリンピックに行ったときも、女の子から髪の毛に触られるガテラ。

それから体型。私はやせてはいない。日本では太い方に入と思う。下半身もしっかりしている。ふくらはぎにおいては、日本人独特の大根足である（ちなみにこれを書いている今、大根足の写真をパソコンで検索したら、足のような形をした大根がずらっと出てきてびっくりした！）。

しかしその大根足こそが、アフリカの人（男も女も）にとっては魅力的なのである。

普段はズボンを好んで履く私ではあるが、たまにはスカートも履きたい。しかも膝下くらいのスカートだ。

そうするとその日はみんな私をほめてくれる。

「マミ、どうしていつもスカートを履かないの？」

「たまにはそうやって素敵（！）足を出さなくちゃ」などなど。

ほめられることは嬉しい。しかしこのシシャモのような足である。複雑な思いに駆られる女心を、女性の皆さんなら理解してくれることであろう。

ルワンダの女性の足はまっすぐで、カモシカのような足をしています。おばちゃんの上半身および太腿部分は果てしなく大きくなってきますが、膝から下は「あの細さである体重を支えるなんて！」と思うほどすっきりしているのです。

彼女たちに大根足という言葉はありません。彼女たちからすると、私はとても魅力的な足をしているようです。

人間って、本当にないものねだりだなあ。カモシカのような足の方が、よっぽどいろんな服が素敵に映えるのに。私なんて、ほしい服があっても、試着室に入って（体型のせいで）まったく似合わず、人生を呪ったこともあるというのに…。

ルワンダの若い女性のような、メリハリがあってすっきりした体型をしていたら、人生楽しいだろうなあと何度思ったことか…。

国によって、いろいろな価値観があるという身近なお話。



雑文もろもろ

もうあっという間に時間が過ぎる！

一日も、一週間も、一ヶ月も、一年もあっという間に過ぎる！困ったものです。大したことをしないうちに、時間だけが過ぎていくのですよ。

今日は気合を入れて、朝からがんばろう！と思うときに限って、必ず何か起きるのです。仕事を中断する何かが。

その日、お昼ご飯を食べようとしていたときでした。パソコン教室のコーディネーターS嬢から電話。私たちも彼女も、ワンラブブランド内のゲストハウスの一室を使って生活をしており、そのゲストハウスは長屋状態であるというふうに想像してください。彼女の部屋から見える光景、「どこから子供が忍び込んできて、キョロキョロ挙動不審である」という報告。その一言ですべてを理解し、そいつらの元へ直線。

不法侵入してきた3人のうち一人を確保。泥棒である。まだ13歳。まずは事情徴収だ。どうやらくず鉄集めをして生計を立てているらしい。発電機の上にかけてあったもう穴が開いてしまったトタンを2枚盗んだ容疑である。

ルワンダの人は過ちを犯した人を容赦なく殴る。案の定捕まえたスタッフは、どこからか木を見つけて殴る準備をしている。

しかしその子は怯えた涙目で、私に許しを請うて来る。「お願い。もう二度としないから、殴らないで。」

体罰もルワンダでは一つの成敗の手段なので、時として私は目をそらして、人が体罰をするのを認めてしまう。しかし相手は子供だ。目の前で人子供が殴られるのを見るのはつらい。

「どこに住んでる？」「家族はいるのか？」

どうやらお母さんと二人で暮らしているようだ。お母さんは仕事をしていないということなので、この子のくず鉄拾いで稼いだお金が、重要な収入源であろう。

周りにいるスタッフは殴ってやりたくてうずうずしている。しかしやはり暴力はやめよう。

「あんた、盗みは良くない。盗みに入るくらいなら、一日時間を作って、この敷地内に落ちているくず鉄を拾って、

掃除しなさい。そうしたら私は許してやる。しかしここにはもう一人ボスがいる。そのボスにも許しを請いなさい。」

そしてガテラ登場。ガテラがそいつの名前を聞いてみると同じ「ガテラ」だという。

「お前、そのずた袋を持ってちょっとこっちに来い。」

くず鉄の落ちているところに、その子連れれて行く。

「いいか？このくず鉄を拾え。人の目を気にして、盗みに入るくらいなら、このくず鉄を拾って仕事をしろ。そして堂々とうちの敷地に入ってきて。もし今拾ったくず鉄が重くて持てないなら、逃げたお前の仲間も呼んで一緒に持つのを手伝わせろ。」

ずた袋はあっという間にいっぱいになり、さっきまで怯えて震えて泣きそうになっていたチビガテラは、最後に「ありがとう」と言って帰っていきました。

お昼ごはんを中断され、おなかのすいていた私だけど、子供が盗みをしながら生きていかなくはいけない現実を見て、なんだか心がぐったりした。

彼がこの先再びくず鉄を盗むために忍び込んでくるか、堂々と門から入ってくるかは神のみぞ知る。

しかし再犯して捕まったら、今度は容赦しないからな！

【ご寄付ありがとうございました】

ワンラブ通信55号をお送りしてから今までのご寄付は以下のとおりでした（8月～11月）

8月	90,000円
9月	241,000円
10月	463,582円
11月	597,200円

このおかげで、ルワンダとブルンジ合わせて、次の製品を配布することができました。

義足	15本
装具	6本
杖	26本
車いす	1人

皆さまの温かいご支援に、改めて感謝申し上げます。

【書き損じはがき・テレカありませんか？】

書き損じはがき、テレホンカード、商品券などありませんか？

お正月にたくさん買ってしまった年賀状や書き損じはがきなど、ワンラブ通信を発送する際の切手などに換えて利用したいと思いますので、ぜひお譲りください。

【お願い】

ワンラブ日本事務所は、皆様のご意見等を積極的に取り入れたいと思っています。ルワンダ・ブルンジについて知りたいこと、ワンラブに対するご意見等、どしどしお寄せ下さい。

通信発行のお手伝い、イベントのお手伝いなど、相変わらずボランティアも募集しております。またルワンダ・ブルンジで中長期のお手伝いをお願いできる方、ぜひご連絡ください。

【おことわり】

* 発送作業の都合上、振込用紙を同封させて頂いておりますが、すべての方に寄付金・会費を催促するものではありません。

* 当団体はご提供いただいた個人情報について、皆さまからご同意を頂いた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはございません。

書き損じハガキ、テレホンカードは下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。

ご寄付は下記の口座まで、みなさまのご支援お待ちしております。

※事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させて頂いています。

必要な場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0051 茅ヶ崎市若松町 12-28-304 Tel: 0467-86-2072/080-6564-4448

e-mail: info@onelove-project.info(日本事務所) onelove@rwanda1.rw(ルワンダ事務所)

郵便振替口座: 00210-5-66497

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

ワンラブ通信56号 2015年12月

発行: ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

<http://www.onelove-project.info/>

<http://oneloverwanda.blog105.fc2.com/>

<http://www.onelove-project.org/>



One Love
Mulindi Japan One Love Project